

「小さな旅」

一・汽車内での出来事 ―一九六九年八月九日と八月十七日―

大学二年時、学外実習を島根県畜産試験場で終え、出雲駅で解散後、フリーとなった。出雲市駅発京都行の普通列車に乗車。宍道湖に沈む夕日が美しかったことが記憶に残っている。

そのオヤジはこの駅から乗車してきたのか忘れてしまったが、あとになって振り返ってみると、いろいろと考えさせるオヤジであった。

そのオヤジ、ウイスキーの小瓶を抱えて小生の隣に座りこんだ。週刊誌を読んでいた小生は、別に気にもとめなかったが、いきなり話しかけてきた。「あとで訳を話すから、これ(ウイスキー)を飲みな」と酔いしれた気分で言う。少しためらったが、「何も恐れることはないから飲みな」というので、しかたなく(?)飲むと、オヤジ「ヤケで飲んじやだめだぞ」という。まさか、このウイスキーに毒物でもはいつていやしいだろうななどと、小心翼翼といったところだった。しかし、そのオヤジがあまりにも真剣そのものなので、注意深く聞くことになった。

オヤジさんの期待にそぐわなかったのか、「ふん、固い奴だな、あんたはまだ甘い」

「オヤジさんの本当の仕事はヤクザだよ」「車中に乗り降りして、この汽車内にも常に二〇名は乗っている」少し妙な気持になってきた。

「俺はな、お偉方の代議士など、気に食わない奴はツチ(土のことか)にしているのじゃ」「お前さん、ヒトの骨を見たことあるか……そうじゃ骨じゃ……」

「……………」

お前さん、出雲はどこを見てきた?」

「大社と日御碕」

「お前さんの見てきたところは絵葉書のところを見てきたのじゃ……もつと見るべきところがあるはずじゃ……」この一言に自分は反省した。そして考えさせられた。

人は、いわゆる有名な観光地へ必ずといっていいほど出かける。それは表面的なものを見て、歴史、昔を学ぶ態度としては失格。歴史の裏に隠されている史実を、列車内で出会ったオヤジは強調したかったのだろう。

「北海道の人をどう思うか?……九州の熊襲についてはどう思うのじゃ……学生さんだろう、わかるはずじゃ……」

質問されて、具体的は答えられなかった。そうとうひどい史実があることがわかっただけで、日本歴史の不勉強さを感じた。考えさせられた。

「いま、オヤジさんはどこにいますか?」と尋ねると、返ってきたのは、意外にも場所(土地)ではなく、「ここにいる」という実存の返答であった。

「世の中はな、弱いものが負け、強いものが勝つ。知恵と腕力じゃよ……あんた、大垣に行ったことがあるか?うちの妹の……まあいいや……親からもらった体だ!大事に使え!人はあてにしてはならない。自分で歩け……いつかあんたと必ず会うだろう!?!」

そう言うって、オヤジは伯耆大山口下車した。

最後に言った「いつかあんたとは必ず会うだろう」という言葉は、一体何を意味しているのだろうか。色々想像してみたが興味悪くなってきた。考えさせられた。

知恵と腕力。一体、今の自分には十分なものがあるだろうか、疑わしい。そして「あんたの廻ってきたところは、絵葉書のところを見てきたのじゃ……」といった言葉も、しばらく離れなかった。

夜行列車の窓の外を見ながら、オヤジの言葉と、自分自身について考えさせられた。

……………

車中での出来事の後、京都から甲子園の高校野球観戦、大阪城、淡路島、徳島県の甲浦、高知県の室戸岬、小豆島などを周遊し、岡山経由で帰途に向かう道中での出来事についても、述べておきたい。

汽車内での出来事から八日目、岡山で手持ちの現金を数えたら二一〇五円。東京までの汽車賃は二五五〇円。

一時、途方に暮れてしまい、どうしようかと迷い、切符を買えるところまで買って、あとはヒッチハイクをしようと思っていた。しかし、学割証を持っていたので、利用すれば二〇五〇円で済む。残り六五円のうち五〇円は、川崎から自宅最寄り駅の武蔵溝の口までの電車で充てられる。自宅につくまで一日半、食事をとらずに過ごし、岡山からは普通列車で乗り継いで自宅に向かった。

途中、熱海行きの列車が興津駅に差し掛かったとき、何か急にブレーキがかかり、ゴトンという音とともに急停車した。時間にして一三時〇五分の時刻であった。別に気に留めなかったが、間もなく駅構内の放送が流れた。「ただ今ホームに人が落ちましたので、しばらく停車します」。子供がホームの隙間に落ちたのかと思っただが、そうではなかった。若い男の人身事故であった。窓からのぞくと、その人の着物がスタスタに切れ、散在していた。真白い口ウ人形のような首なしの死体が横たわっており、頭はちよんと目のあたりから真っ二つに割れ、見るも無残な哀れな姿であった。女の人たちは、目を覆っていた。

あの伯耆大山口で降りたあのオヤジさんの言葉を思い出した。「親からもらった体だ。大事に使い」

二・峠をめぐる山旅 ―一九七一年一月〜三月― 単独行 一泊二日の旅

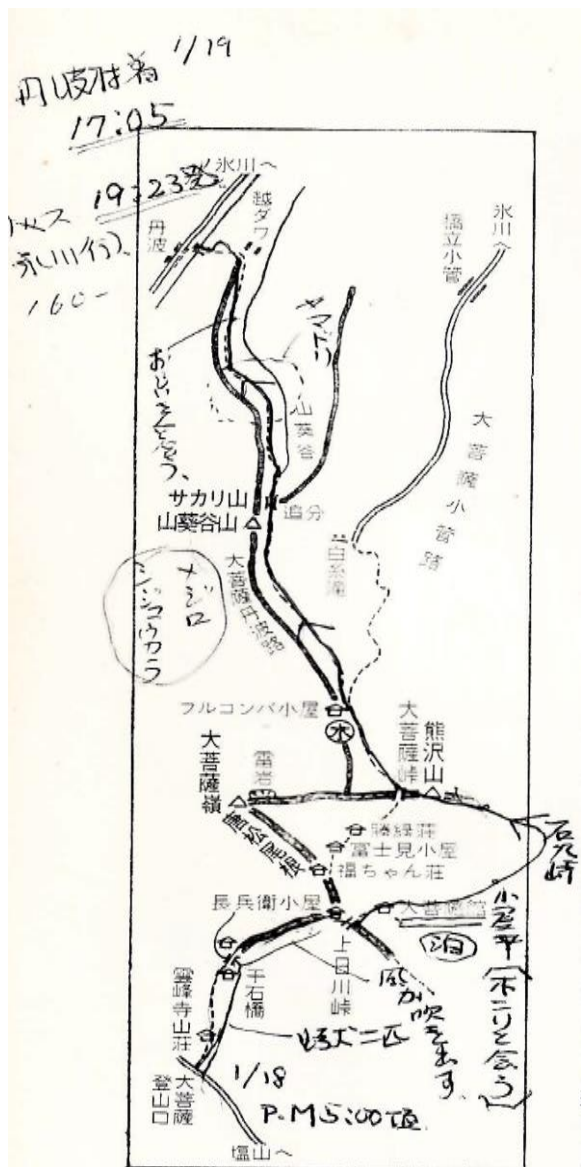
(一)大菩薩峠超え 一九七一年一月一八日〜一九日

大菩薩にはいくつかの峠があり、それぞれの趣がある。甲斐路から丹波へをめぐる峠越えしたときの記録である。

中央線塩山駅からバスで大菩薩峠登山口へ。午後五時ころから歩き始めた。雲峰寺山荘先の歩道で野犬二匹と出会い、怖い思いをする。かなりしつこく吠え続け、後を追いつつ続けた。懐中電灯が防衛よけになった。

道標に導かれて上日川峠への道をとった。最初、材木切り出しひろばまでは良い道が続いたが、風が吹き出した。上白川峠からは、大菩薩館へ下る道をとった。ここで宿泊。無人であった。

翌朝、大菩薩館からは、石丸峠へ向かうため、ぐるりと山腹をまわり小さな沢を通った。カラマツ植林を抜けて小屋平のジグザグ道を上った。小屋平では樵と出会う。斜面を横切りながら登ると、石丸峠着。大菩薩峠へは、熊沢山ののぼりから始まり、暗い木陰から飛び出したところが大菩薩峠であった。ハヶ岳や南アルプス連峰が連なり、絶景。大菩薩峠は一八九七m。北側の奥多摩方面を目指して歩く。丹波へは、左の山腹の牧道を選ぶ。落葉樹林から雑木に変わり、木の間から奥秩父や奥多摩の山々がわずか望まれた。途中、メジロとシジユウカラに出会う。追分に出て、山葵谷の源流を通り、大きな流れを下るとやがて越ダワについた。ヤマドリを見かけ、その先で老人とすれ違う。丹波の人家を多摩川の向こうに見ることが出来、川を渡れば丹波山村役場前にたどり着いた。一七時〇五分になっていた。丹波一九時二三分発の氷川行のバスに乗り、帰途についた。行程中は、登山客誰とも会うことなく、静かな山旅であった。



(二)那須連峰——一九七一年二月二日～二三日

栃木県北部にそびえ、白い噴煙をあげる那須山。裾野が広く、高原地でもあり、温泉を抱えているところに魅かれて、山旅を試みた。とくに昔ながらのランプが旅情を慰めてくれる一泊二日の行程の山旅を実行した。宇都宮駅七時一〇分発の東北本線に乗車し、黒磯駅に八時〇六分着。駅からは、湯本温泉行のバスに乗車。約四〇分で湯本着。ここから高原バスに乗り換えて終点の大丸温泉まで三〇分。

登山道から鉢山事務所までトラックが入る広い道で、鳥居を潜り抜けると、ゴロゴロした溶岩の道になった。峰の茶屋からは、噴煙の茶臼岳が目の前にそびえ立っていた。分岐点を過ぎると、一五五〇mの三斗小屋温泉にたどり着いた。今晚の宿は煙草屋で休むことにした。山屋向きの宿で、山の話、狐の話、熊狩りの話まで、心ゆくまでくつろいだ。温泉に入りながら至福の時間と空間を過ごした。まるで我が家のようなであった。

翌日の行程の記録が手元にないので、詳細についてはわからないが、元の道を引き返して黒磯駅まで戻った記憶がある。

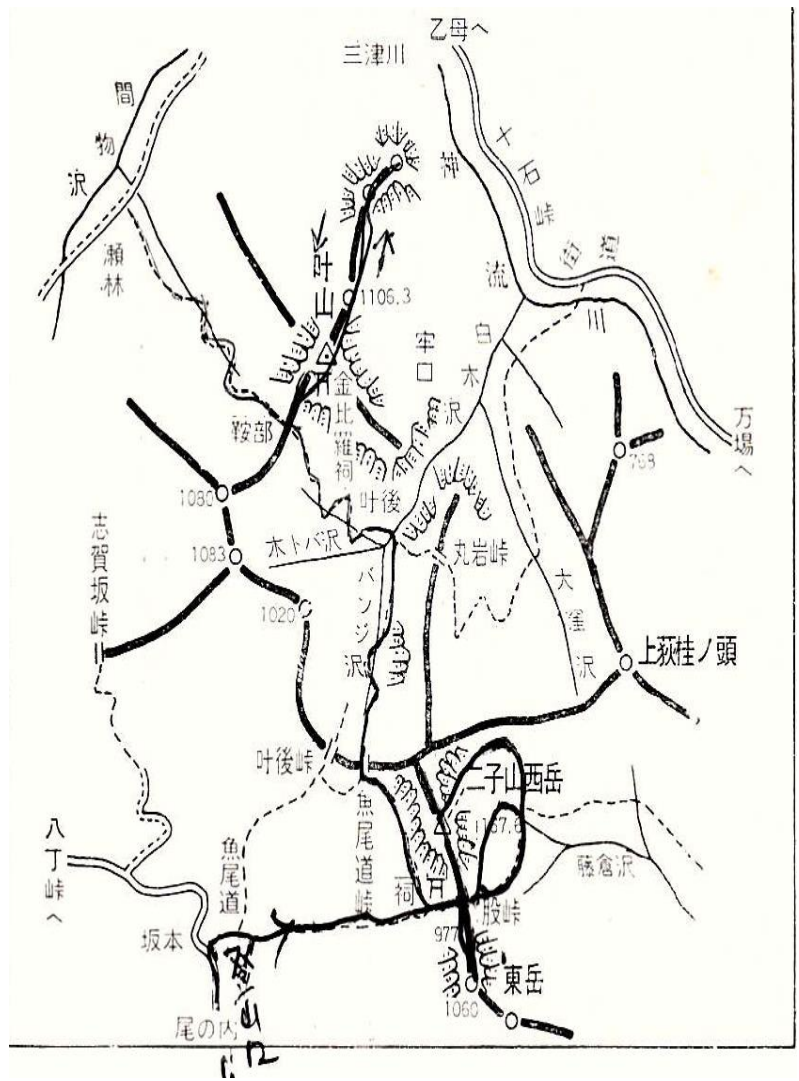


(三)二子山・叶山・股峠——一九七一年三月二四日～二五日

北秩父の変った山々を訪ねた山旅の記録である。二子山は、埼玉県と群馬県境付近にあり、石灰岩秩父古生層からなっていて、中央部で股峠のくびれを生じ、峠を境に東岳と西岳に分かれているところから二子山と名付けられたらしい。

午後から出かけた。自宅から電車を乗り継ぎ、秩父駅で下車。駅からバスで小鹿野へ(約四〇分)。そこからさらに納宮までバス乗車(約四〇分)。さらに、約三〇分歩き、尾の内付近で野宿した。

翌朝、尾の内から三〇分ほど歩き、登山口に入り、二子山に向かった。入り口から一五分で広い道に出るが、股峠への道は大きな案内図のところにあった。ここから沢に沿って急な道を上り杉林を抜けると、白い岩肌の二子山が見えた。右側の東岳から先に登ることになったが、急な登りであった。その後は、石灰岩の露出した尾根づたいに約二〇分で西岳に登った。その後、叶山へのコースをとることにして、またもと来た道に戻り、尾の内、納宮、小鹿野経由で秩父駅に戻った。この日は、変化にとんだおもしろいハイキングが出来た。



地図は、「峠をめぐる山旅」ガイド 田沢武夫編 朋文堂・ケルン新書23(一九六四)より

三. サイクリングの旅 伊豆大島から金沢へ 一九七一年八月

大学四年生の夏、学徒援護会(注一)の紹介で伊豆大島の寿司屋に住み込みのアルバイトがあることを見つけ申し込んだことから、旅が始まった。アルバイトで得た所持金をもとに、自転車で伊豆大島から伊豆半島を経由し山梨県、長野県そして富山県の日本海沿岸までサイクリングの旅を企てた。その時の記録である。手元に詳細な記録がアルバムくらいであるため、記憶をたどりながら振り返ってみたい。大学一年時の東北サイクリング旅行の記録と比べると、このころの記録はあまり残されていないのはなぜだろうか？

二〇二〇年六月五日記

注一 学生の厚生・援護を目的とした財団法人。戦時中に軍需工場などに動員された学生・生徒の業務上の災害救済や教養指導を行う動員学徒援護会として設立。勤労学徒援護会を経て、昭和二十二年(一九四七年)、学徒援護会に改称。全国の主要都市に学生相談所・学生会館を設置。学生寮・学生センターの運営、下宿・貸間・アルバイトの斡旋(あせしん)などの事業を行った。

伊豆大島へ

竹芝桟橋から東海汽船に自転車と共に乗船し、元町まで向かった。元町では、M寿司(注二)の主人が迎えてくれた。中年のご夫婦で、当時小学生の息子が二人いた。剣道を習っていたようだった。

初日から寿司店に住み込み、店の接客、皿洗い、出前などのアルバイトをした。店では、見習いの板前数人とアルバイトの学生が何人か出入りしていた。夜には、翌朝の東海汽船に積み込む折り詰め寿司弁当の盛り付けをした。店には、せいじさんという若い男が、寿司の折り詰め弁当を運ぶ役目であったことを覚えている。出船

ぎりぎり時間まで店から港に車で運んでいたことが印象的であった。

アルバイト終了後は、東海汽船に自転車を積んで乗船し、当初の計画通り伊豆半島伊東まで目指した。アルバイトで得た資金をもとにサイクリングの旅が始まった。

注二 大島元町港近くにある寿司屋。二〇一四年伊豆大島の都立大島高校に教育実習を行う学生指導のため出かける機会があった。その時、当時お世話になったM寿司を訪ねた。空き地になっており、ご夫妻はだいぶ前に亡くなったことを宿泊したご主人から聞いた。この時に年月の移り変わりを実感したのだった。

伊東から金沢へ

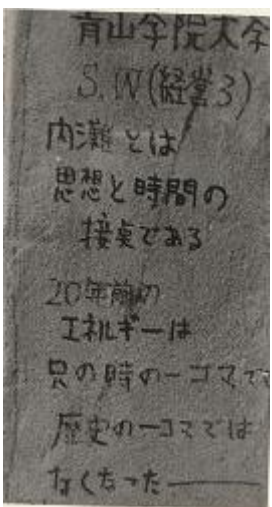
東海汽船に自転車とともに乗船し、伊東へ向かった。葦山方面を走り、ある橋の下で野宿をした。

山梨県韮崎市を通り、ある橋を渡ったところで自転車を止めて地図を眺めていると、通りがかりの女性に声をかけられた。南巨摩郡の中学校美術の教師で、私が昔の教え子に似ていたので声をかけたとのことであった。このあと、女性の自宅まで案内され、昼食をこちそうになった。小さな女の子が二人おり、一緒に和室座敷で天ぷらを食べたことを覚えている。この後の主だった行程は、長野県の中の湯から安房峠を越え、岐阜県に入り、高山市内の神社で野宿したことを覚えている。神社の境内で遊んでいた子供たちの歓声で目が覚めたのである。この時の旅は、野宿主体であったと思う。学校や旅禍に泊まった記録は残されていない。

岐阜県の奥深い溪谷見下ろしながら狭い山道を通り、富山県境の人喰谷、城端に達すると平野部に達した。石川県金沢市内は間もなくであった。そこから内灘海岸に向かい、浜辺でしばし物思いにふけた。

射爆場跡地の壁に青山学院大生のメッセージが描かれており、心に留めた。内灘海岸まで足を運んだのは、当時、五木寛之の「内灘夫人」(注三)の本に触発されたからであった。残り少ない大学生活最後の夏を振り返りながら、感傷的にサイクリングの旅を振り返った。

注三 大学四年時は五木寛之の本に傾倒した。「風に吹かれて」のエッセイをはじめ、内灘夫人まで読んでいたことを思い出した。



四・八方尾根で過こした日々 一九七二年十月十五日〜一九七三年三月十日

大糸線の松本駅から糸魚川駅行き列車は、静かな谷合を走っていた。

車窓からは、きれいな茶褐色の山肌が三つ見えてきた。白馬三山(注)であった。吸い込まれるような山容に魅せられたのがきっかけで、山麓にある白馬駅に下車した。

白馬三山に引きつけられたのが縁で、この年の十月から翌年の三月まで、これらの山々を手の届く所で見る事が出来る八方尾根の山荘で暮らすことになった。

当時の私は、都会を脱出した、気持ちが強かった。北アルプス方面目指して自宅を出たが、行先は特に決まっていたわけではなかった。とにかく、山小屋で暮らしたただけであった。就職浪人中であったことも身を軽くした。

晩秋から、冬、そして春にかけて、約五か月間、八方尾根の山荘を囲む自然環境は、当時の私に大きな刺激と深い印象を与えてくれた。

反面では、人里離れた環境で一時的に過こすには半年で十分であることも体得した。人間には限られた情報の中で過こしていると、思考が停止してしまう経験を何度も味わった。若い時には、知的刺激が必要であることも同時に悟ったのだ。やはり、都会に戻って思いっきり知的刺激を浴びながら過こそうと決意したのだ。この時の経験は、後日の仕事において十分に反映されたと考えている。

三月に八方尾根から下ってきた白馬駅のプラットホームで感じたこと。春の淡い陽ざしと雪解けのせせらぎ音を聞きながら、自然に刻み込まれて過こした日々を振り返りながら、新たに迎える生活への一歩を踏みこむ決意を湧き起こしてくれたのも事実だった。写真は当時の写真。

注 白馬三山(しろうまさんざん)とは、富山県と長野県にまたがる三つの山(白馬岳、杓子岳、白馬鑓ヶ岳)の総称である。

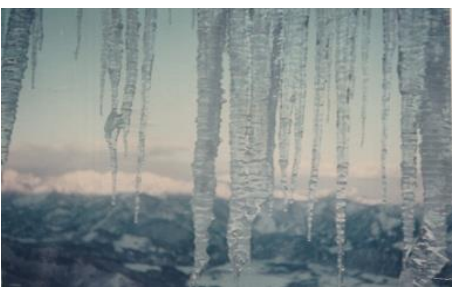
晩秋の白馬三山



厳冬の白馬三山



山荘にできた氷柱



五・徳本峠を越えて* 一九七五年八月

北アルプスの後立山連峰を縦走して、松本駅から島々線へ島々についていたのは、夜もかなり遅くであった。駅前ベンチで寝袋にくるまって夜を明かした。早朝、徳本峠へ向けて歩いて行った。左右の山々から切れ込む島々谷の小さな橋のたもとに、徳本峠入り口の道標が立っている。

ここから溪谷に沿って奥へ奥へとたどる道は、ゆるやかなカーブを描いている。二股の発電所入り口を過ぎると、道は直角に折れる。鬱蒼と繁った樹々の中を、行きかう人もないひんやりした谷間の道は、このあたりからその深さを増していく。

どれぐらい歩いたであろうか。小さな小屋が見えた。岩魚止め小屋である。イワナが生息する山深い中にあることから名付けられたらしいその小屋はあった。随分昔のことになるが、集中豪雨によって登山者が小屋の前にある橋を渡る際に、助けようとした岩魚止め小屋の御主人が不運にも濁流に流され、帰らぬ人となってしまった。小屋の主人とは会話を交わしたことがあっただけに、その時のことはいまだに記憶に焼き付いている。

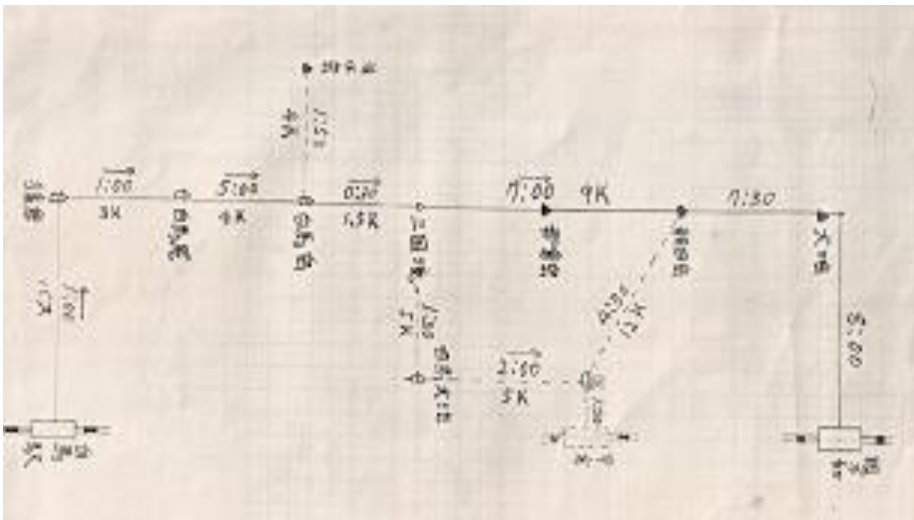
岩魚止め小屋からは、ジグザグの登り路が続く、視界が開けたところに峠があり、穂高連峰が見えてきたことを覚えている。その日は徳沢園のキャンプ場にテントを張って夜を明かした。

上高地には、梓川周辺のケショウヤナギが美しいイメージを抱いて入ったのだった。学生時代読んだ北杜夫の小説に出てくる旧制松本高等学校のことや北アルプスの動植物のことが頭の中を駆け巡り、想像力が現地へと足を運ばせたのだった。

* 社会人になってからの山行である。日付は不明。

六、白馬・梅海新道縦走 一九七七年七月三十一日〜八月四日

当時の山行行程表などが記録されたノートがでてきた。高校教員時代に山岳部の副顧問をしており、高校生の夏合宿例としては数少ない白馬から朝日岳を経由して梅海新道縦走を試みた記録である。山行計画が良く練られており、避難経路や食糧計画とメニュー、団体装備や個人装備なども詳細に記載されている。





7月31日 日曜日
第2日

4:00 猿倉
↓ 1:00
5:00 白馬岳 アイゼン 装着
4:20
↓ 2:30 大雪溪 ケルシ
8:50 荒平 行動食 / 20g
9:10 (初ヒッ) 岩室 小雪山 古花油

9:40 頂上宿舎 テント場
9:45 予備投
10:00 自由 100張位 臨時郵便局

白馬岳 アタック 11:00
↓ 0:30
頂上 11:30
13:00
↓ 0:10
13:10

テント設営 10:45
自由時間 11:00マシ
白馬頂上 アタック 11:00 ~ 13:10
自由時間 15:00マシ
食事準備 15:00マシ
食事 16:00
ミーティング 16:30
消灯 17:00

7月31日 日曜日
第1日

2:00 大雪溪宿舎
6:00 大雪溪 宿舎 準備 一人
午後1時以上
午後4時以上

8:00 大雪溪
12:51 大雪溪
14:00
14:30 大雪溪 宿舎

14:00 大雪溪宿舎
15:00 大雪溪宿舎
16:00 大雪溪宿舎
17:00 大雪溪宿舎
18:00 大雪溪宿舎



白馬大雪渓から裏銀座の山々、朝日岳までの写真はあがるが、糸魚川に抜けるまでの写真は少ない。

七. 塩見岳 単独行 一九七七年八月四日〜七日

八月四日(木)系魚川駅発八時五十七分。辰野駅十二時六分着。(こ)から塩見岳に向かった。塩見岳に行くことになった。きっかけは本多勝一(当時朝日新聞記者)の影響からであった。南アルプスからの遠望をイメージして登山したい山の一つに挙げていた。伊那大島十四時五十五分着。バスで鹿塩へ十八時八分になっていた。その晩は、カンバ沢小屋泊まり。この後の行程は、当時のメモから記載する。南アルプスはアプローチが長いことを実感した。山容は樹林帯が多く、視界が開けても北アルプスのような景観は見られない。塩見岳も単独のピークの一つの中にあつた。山道でライチョウを見かけた。

八月五日(金) 四時三十分起床。五時三十分カンバ沢出発。七時十分沢から尾根のとつき部分で小休止。合目まで二回の小休止を入れる。十時十八分三伏峠着。お花畑を見る。十一時二〇分三伏小屋のテント場着。テント場に泊まる。

八月六日(土) 五時三十五分三伏小屋テント場を出発。六時十五分本谷山着。七時四十七分塩谷小屋着。八時四十分塩見岳着。八分後に塩見岳のピーク着。約一時間休憩後に塩見岳を後にして三伏小屋へスキャンプ十一時五十五分着。十四時十五分三伏峠着。水場経由で十六時三十三分塩川着。十七時二十五分樺沢小屋へスキャンプ着

八月七日(日) 五時三十五分樺沢小屋へスキャンプ発。六時三十三分鹿塩着。七時三十分伊那大島着。辰野、甲府、高尾、八王子経由で十六時三十五分自宅に戻った。



八・わたしの散歩道 一九八四年、二〇〇三年

居住地近くには散歩道が数多くある。二つ紹介する。一つ目は、一九八〇年十二月から一九九〇年〇月まで横浜市磯子区上中里町に住んでいたころ、好きな散歩道をまとめた記録。二つ目は、一九九〇年〇月から現在住んでいる茅ヶ崎市赤羽根において、私の散歩道としてまとめた記録である。

(一) 市民の森に奥多摩か丹沢を感じる

磯子区南部に位置する氷取沢市民の森は、私の好きな散歩道です。氷取沢バス停近くから市民の森に入り、笹下川沿いに約五百メートル歩くと案内板が見えてきます。ここを左折して五十メートルほど行くと、にわかに様相が一変し、朽ちたワラぶき屋根を左に見て急坂を上がると、一瞬ここは奥多摩か丹沢あたりを歩いているという錯覚に陥るから不思議です。

ここから「なばな休憩所へ至る十数分間は、私にとって市民の森全体の中で最も心安らく空間と時間です。春・夏は金沢自然公園へ。秋には天園から鎌倉を散策。冬には能見台へ至るコースを歩きます。

(広報よこはま いそこ区版 一九八四年四月号 私の散歩道に掲載された記事より)

(二) 殿山公園から浄見寺(茅ヶ崎市) 高い木立抜け麦酒蔵へ

ゴルフ場の中を通る道があると聞いて茅ヶ崎に出かけた。殿山公園前のバス停から、八幡神社へ通じる道を横切ってしばらく行くと、ゴルフ場「スリーハンドレッドクラブ」のクラブハウスがあった。

クラブハウスを過ぎ、トンネルを抜けると、道路の両側がゴルフコースだった。

ボールを避けるフェンスがいささか目障りだが、高い木立に囲まれてゆったりと歩ける。木立の間にフェアウエーが広がり、プレーしているゴルファーたちがすぐ近くに見える。鳥の声がにぎやかだ。

住宅地に入り、右に折れると、正面に茅葺きの民家が見えた。民俗資料館となっている旧和田家。一八五五(安政2)年にたてられたものを、ここに移築したという。

その手前が浄見寺。大岡越前守の墓があることで知られる。門前の右柱にまといの図柄が彫り込まれ、本堂のさい銭箱も巾着のかたちをしていた。

山門の左手の一段高い所に大岡一族の墓所があり、五代目の越前守忠相の墓がひとときわ大きいのが面白い。境内の奥には、これも民族資料館になっている旧三橋家がある。

湘南ビールのレストラン湘南麦酒蔵に寄った。入り口にビールの醸造所があり、できたてのビール五種類が楽しめる。肉、魚、パスタと三種類のランチが人気で、女性客も多い。

谷島英樹店長は「敷地内にある井戸の水と茅ヶ崎の魚、地元の有機野菜が自慢です」と話す。第三月曜日と平日の午後三〜五時が休み。ここからJR相模線の香川駅まで十分たらずだ。歩いた時間約二時間。

(朝日新聞 二〇〇三年一月三〇日 かながわ一〇〇選 わたしの散歩道 四十三)記事より

